



昔々インドネシアの最東の地イリアンジャヤの西部に点在する島々には、
隣島ハルマヘラより舞い降り、魔法など特別な力を持つ王が存在したという。
戦乱の時代その王達が各国との戦いから護り抜いた海は、
後にラジャアンパット（4人の王）と呼ばれるようになった。
古の伝説が息衝く未知の海域へ旅が幕を開ける。

インドネシアの愛でし海

Raja Ampat

Photo Kyu Furumi
Design Tomato
Special thanks World Tour Planners

ラジャアンパット

ラジャの夕陽は美しい。ある日の小さな小島に虹がかかった

四皇の愛でし海
ラジャアンパット

ここは秘境への入り口

巨大なマンタが未だ見ぬ世界へエスコートしてくれているようだ





01

四皇の愛でし海 ラジャアンパット

秘境。そう聞いただけで、一体どこに存在するのか？そこには何があるのか？さまざまな事を想像し、思いを馳せ、普段は胸の奥にひっそりと閉じ込めている好奇心や冒険心が剥き出しにされてしまう危険な言葉。様々な情報が揃った現代では秘境と称される海は数少ない。しかしラジャアンパットは間違いなくその部類に入るだろう。日本を出発し、ジャカルタ、マカッサルなどを經由しイリアンジャヤの西端、ラジャアンパットクルーズの拠点となるソロンへ到着した。

長旅の疲れなどすっかり忘れ、そそくさと器材を用意してチェックダイブに向かう。秘境への第一歩。胸が高鳴る瞬間だ。ファーストエントリーはBATANTA島のポイント「Tj Makoi」緩やかな流れるスロープを滑りながら進むとフェージュラーの団体が狂ったように泳ぎ回っている。何か大型のアジにでも追われているようだ。そしてよく目に付いたのが実にカラフルな美しいサンゴ。ソフトコーラルはピンクやオレンジの絵画。ハードコーラルは自然という名の高名な作家が創りあげた彫刻。ラジャアンパットの海はまさに天然の美術館。全く荒れていない海のあるべき姿がそこにはあった。翌日からのダイビングも否応なしに期待が高まる。



02



03



04

- 01/ハードコーラルの群生は創造を絶するほど美しい
- 02/岩の穴を覗いてみたらウミトサカの絨毯が敷き詰められていた
- 03/メラネシアンアンティラスなどの群れもカラフルで美しい
- 04/巨大なシーファンも見応えが充分だ

原始の海に出会う



01



02

四皇の愛でし海 ラジャアンパット

01/平べったいサメであるオオセの仲間「タッスルドウオビゴン」
02/うのように動くヒラムシが気になっているようです

03/ピンクのピグミーシーホース。やっぱり可愛いっす
04/体にコブの無いバージョン。スマートな感じです
05/模様の美しいブルーリングオクトパス
06/マッシュルームコーラル・パイプフィッシュ。長い名前……
07/こちらはイエローバージョン。ホストの色によって体色が変わります

ラジャアンパットは秘境と呼ばれるだけあって、かなり個性的な面白い生き物が数多い。特筆すべき生物といえば通称ウオビゴンと呼ばれるオオセの仲間だろう。「NAPO API BOX」や「LOLOSHI POINT」など幾つかのポイントで出会うことができる体長1mを超える平べったいサメの仲間だ。顔には仙人を思わせるような無数の髭。遙か昔からラジャアンパットを見守ってきたかのような、この海の番人のような

風格が漂っている。そして僅か数センチほどのピグミーシーホースの仲間も沢山存在する。コブが付いているもの、海藻と見間違えそうなものなど、様々なバリエーションが見られるのもラジャアンパットの魅力だろう。実際のところピグミーシーホースほどのポイントでも毎日見ていたような気がする。これほど数が多いというのも海が全く荒れていない証拠なのではないだろうか。

ラジャアンパットの奇人変人



03



04



05



06

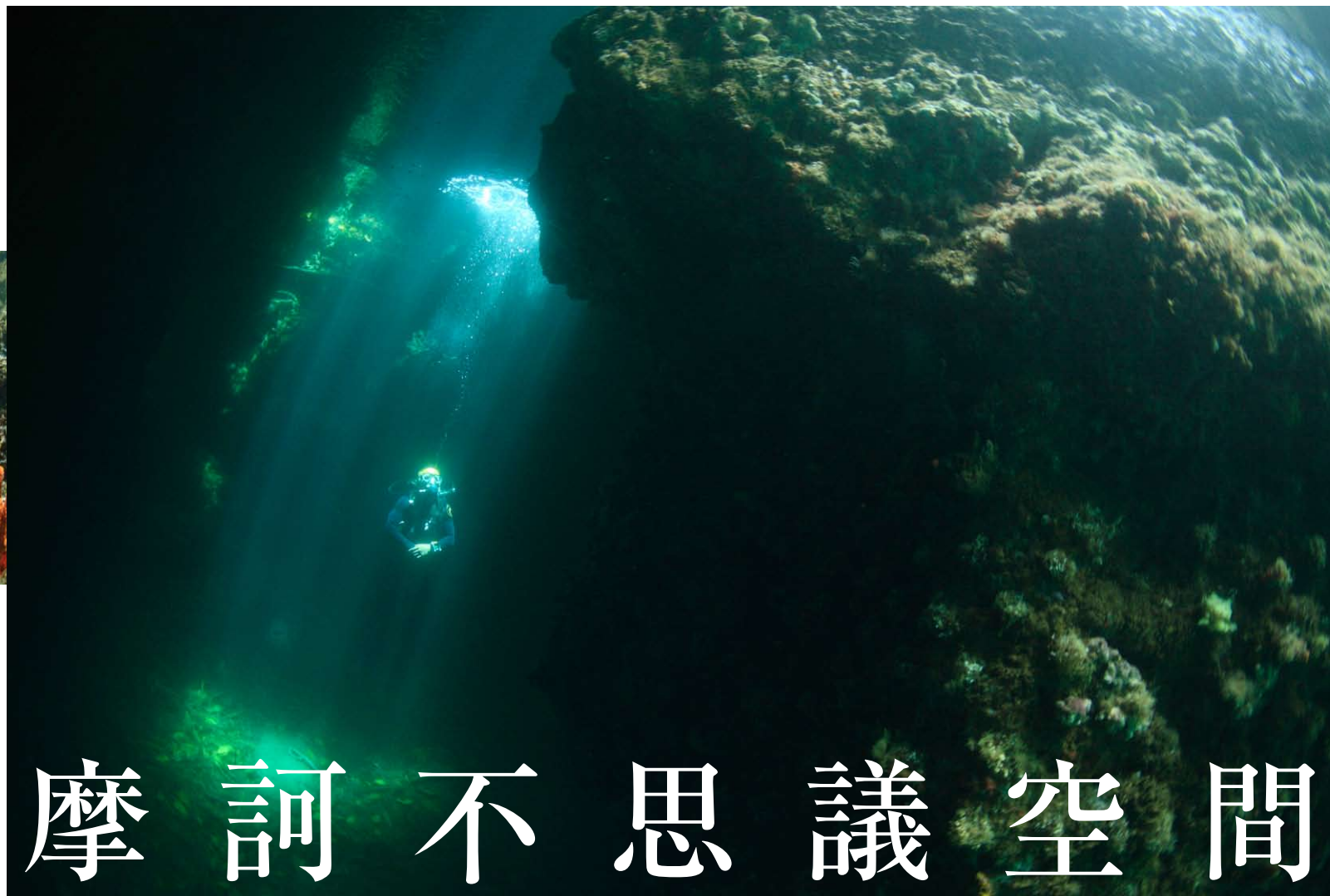


07



生い茂る緑を見上げながら水中を楽しむ不思議な感覚

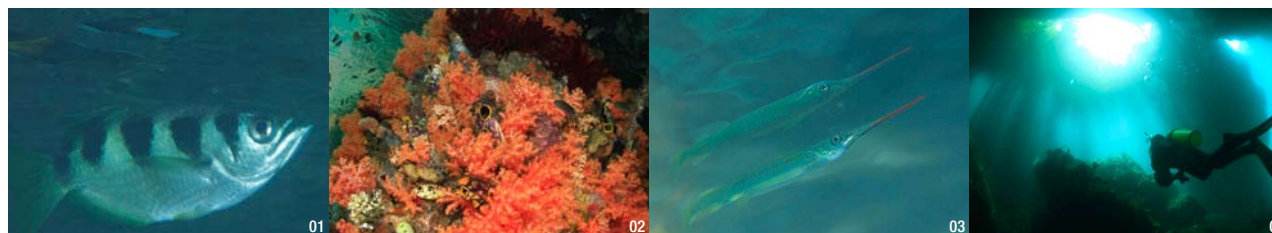
この海域は本当に面白いところだと痛感したのが秘境ラジャアンパットの中でも特殊なPASSAGEポイントだ。「PASSAGE 1」と「PASSAGE 2」との2つのルートに分けられる。パラオのロックアイランドを思わせるモコモコとした小さな島の間を船で進みエントリーする。その直後「???」が頭の中に点灯。「あれ? テッポウウオ???」普通海ではまず出会うことが無い魚に会い、ここは汽水域なのだと気づく。壁には鮮やかなソフトコーラルと紫や黄色のホヤがびっしりと付着する。そして水面を見上げれば青々とした木々が茂る。森の中で潜っているような何とも不思議な気分が陥ってくる。太陽の光線が燦々と降り注ぐケープもある。感覚的にいうと光溢れる海の森に潜っているような感じだ。



摩訶不思議空間

THE PASSAGE

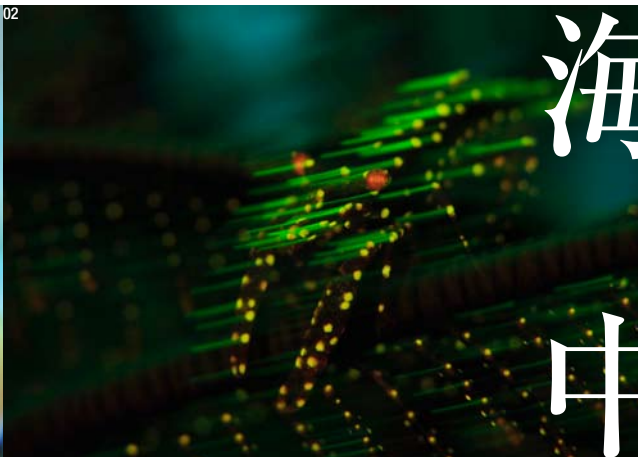
強烈な光芒が海中に降り注ぐ。神様が降りてきそうな感じ



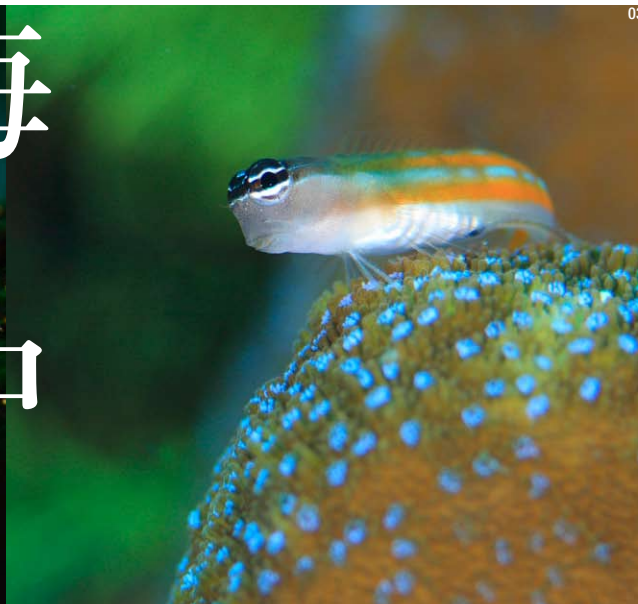
- 01/どこかで見たことある魚だなあとと思ったら、テッポウウオでした
- 02/この汽水ポイントもソフトコーラルが鮮やかです
- 03/水面の鏡で身形をチェックするサヨリの仲間
- 04/海底探検に出かけて財宝を見つけたような感覚になります



01 02



海中劇場



03



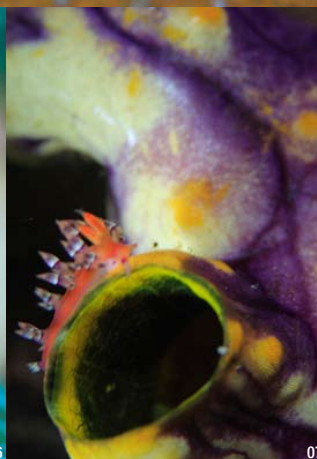
04



05



06



07

先ほど少し触れたがラジャの海には岩などに付く付着生物が豊富だ。カイメン、ホヤ、ウミシダ、ソフトコーラルなどなど、それらにウミウシや甲殻類が乗っていたり魚が隠れていたりするのである。写真を撮る者としては実にたまらないシチュエーションがゴロゴロ転がっているのである。マクロ生物もいつもより少し注意深く観察し、色々な視点からじっくりと面白い写真を狙ってみたい。

01/シラナミウミウシ。レアチーズケーキみたいです

07/アデヤカミノウミウシ。こんなシチュエーションもよく見られる

02/星空のような模様のあるバサラカクレエビ

08/ニシキフウライウオなども居たりします

03/何かを見つめるコムトウズブレニー

09/ノコギリハギの子供がサンゴの間を泳ぎまわっていました

04/頭隠さず尻も隠さず

10/所々にあるシャコガイを覗くとメニーホストゴビーがよく乗っています

05/ピエロの鼻にウミウシが乗っていました

11/小さなハナダイを狙うサラサゴベ

06/ラジャアンパットはニシキボヤを背景に色々な写真が撮れます

12/コブシメに眠そうな目で見つられました

ラジャンンパットを彩る生物達

四皇の愛でし海
ラジャンンパット



08



09



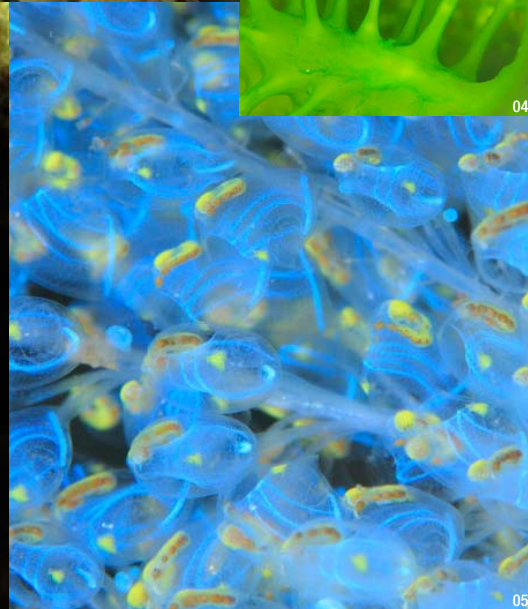
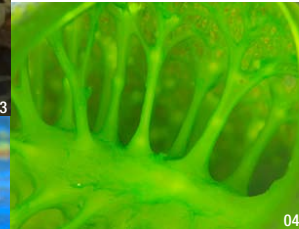
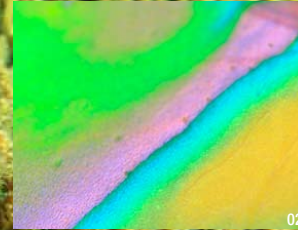
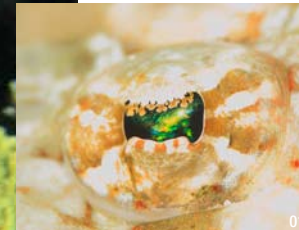
10



11



12



楽しきナイトダイブ

個人的にはどこの海に行っても積極的にナイトダイブをするようにしているのだが、ラジャアンパットでのナイトダイブは本当に面白かった。あまりの面白さにクルーズ期間中、毎晩潜り続けてしまったほどだ。生き物達がぐちゃりと溢れかえっていた海が、夜には全く表情を変える。昼間泳ぎ回っていた魚達の寝息を聞きながら、夜行性の生物と戯れる。なかなか素敵な時間だ。そして夜の海でも驚きの出会いがあった。ガイドがもの凄い勢いで僕に向かって

ライトを振り回している。何やらサンゴとサンゴの間を照らしている。奥の方で何か動いているのは見えるけど……。と思った次の瞬間、細長い魚がサンゴの隙間から飛び出てきた！かなりビックリしたがこの魚はラジャエポレットシャークというこの海ならではのサメ。胸鰭を使ってヨチヨチ歩くなんとも可愛いサメだ。昼間は殆ど目撃されず運が良ければナイトで出会うことができる。ラジャンパットでのナイトダイブは昼間とはまた違った興奮が待ち構えている。

ナイトで出会ったラジャエポレットシャーク。運が良ければ出会える

ラジャアンパットの旅も終盤。群れを成す魚達。海底を埋め尽くす色とりどりのサンゴやホヤ。不思議な汽水域やあまりにも特徴的なサメ達など、まざまざとその実力を披露してくれた。でも何かが足りない気がする……。そう、大物との出会いが足りない……。もう十二分に順調すぎるほどに撮影は進んでいるのだが、そんなことも欲の出たカメラマンは感じてしまう。しかしそれにも応えてしまうのが秘境の底力なのだ。

MANSUAR AREAのその名も「MANTA POINT」。フラットな砂地に小ぶりの根がポツリポツリと点在するポイントだ。そこにはホンソメワケベラなどのクリーナーフィッシュが根付き、かなりの確立でマンタ達がクリーニングを受けにやってくる。それも一匹だけでなく複数でやってくるのだという。砂地に着底しジッと息を殺してマンタを待つ。数分後巨大なマンタが現れた。ダイバー達のボルテージは一気に上がるが、ストレスを与えぬよう距離を置きながら撮影を繰り返す。するとマンタは気分が良さそうに我々の周囲を巡回する。すると遙か視界の先から次々とマンタがやって来た。ホワイトマンタだけでなくブラックマンタも混じって行進してくる。急ぐことなく優雅に羽ばたく彼らは、遠く秘境まで来た我々を歓迎してくれているかのようであった。最後の最後に隠されたラジャアンパットの粋な演出。これまでの深く心に刻まれた一本一本のダイビングを噛み締めながらマンタとの戯れを楽しみ、そして全行程を終えた。



01



02

01/ダイバーのことなど気にすることなく頭上を通り過ぎていく

02/ブラックマンタの個体数も多い

秘境の旅の終演を飾るマンタ達。

白黒両方のマンタが入り乱れる。息を飲む瞬間



01
02



03

04

Information

About Boat

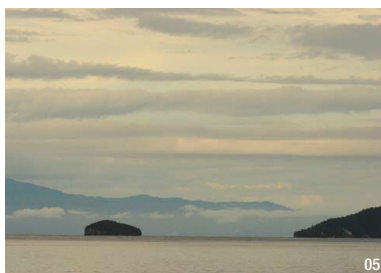
世界遺産コモド諸島をメインフィールドとして航行し人気を集めているサザンスタークルーズが期間限定で秘境ラジャアンパットでのダイブクルーズを開始する。確かな眼力を持つチーフガイドの唐沢氏をはじめ日本人スタッフも乗船し、素晴らしいラジャアンパットの海を華麗に演出してくれるだろう。クルーズ期間中の食事は日本人の口に合うインドネシア料理を中心に和食も登場するので、長期間の乗船も全く苦にならないだろう。基本的にはダイビングの合間には常に美味しい食事をしている感覚なので食べすぎには注意したい。

Diving Style

ダイビングは基本的に一日最大3～4本。2グループに分け本船から2隻のデインギー乗り換えてポイントに向かう。ポイント全体に言えることとしては、基本的にカレントは緩やかなポイントが多いのだがPASSAGEなど時に強い流れが入るポイントもあるので、ガイドの動きや指示はまめにチェックしてもらいたい。切り立つようなドロップオフのポイントはほとんど無く、なだらかに下っていくようなスロープ状のポイントが多い。そして一日の最後の4ダイブ目はサンセットダイブかナイトダイブになる。是非ともナイトも積極的に潜り、ラジャエボレットシャークなども出会ってみたい。

Access

ラジャアンパットへの基本的な行き方としては、まず日本を出発しジャカルタへ向かう。ジャカルタから国内線に乗り継ぎマカッサルを目指す。マカッサル到着後、再び乗り継ぎを最終目的地ソロンを目指す。私が行った際はジャカルタのトランジットホテルで仮眠し、翌早朝にマカッサルへむかったのだが、出発日によって、フライトスケジュールが違うので予約の時点で最新の情報を入手したい。



05

01/最終日に立ち寄った島の子供達。素朴な笑顔がなんとも可愛い 02/砂浜の何気ない美しさを見つけました 03/子供達が座っていた桟橋の下には無数のアジが群れていました 04/コモド諸島の海を開拓してきたサザンスタークルーズが満を持してラジャを巡る 05/朝目が覚めた時の島々の光景も美しい